川村学園女子大学研究紀要　第4巻　第1号　85頁—98頁　1993年

# 英語における中間構文再考

福　田　久美子

# English Middle Constructions Revisited

Kumiko FUKUDA

## 1．序

伝統文法を代表する Jespersen が能動受動態(activo-passive)と呼んでいた中間構文(middle construction)がここ数年盛んに研究されている。形式上は能動態であり辞書では自動詞に分類されているが，意味上は表層にない動作主による受動態のように考えられているため問題が複雑に絡み合ってその派生過程等が学者間の論議の的になっている。特に，Keyser and Roeper (1984)，Fagan(1988，1992)は主に中間構文の動詞に着目し，統語論および意味論の枠組みからこの動詞が語彙部門(lexicon)での派生なのか統語部門での派生なのか[1]，また，本来的には自動詞なのか他動詞なのかということを論じている。また，Fellbaum(1986)，Fagan(1988，1992)は統語上のさまざまな現象を検討し，中間構文の状態性を，Stroik(1992)は従来具現されていないといわれていた中間構文における動作主の具現について考察している。

この中間構文(1)と形式上，あるいは，意味上の類似から比較論議される構文に，いわゆる能格動詞(ergative verb)[2]を含む構文(2)と総称文(generic sentence)(3)が挙げられる。

(1)　The floor waxes easily.
　　Paper burns easily.

(2)　The door opened.
　　The ice melted.

(3)　The beaver builds dams.
　　Papayas grow well in tropical climates.

中間構文は，形式上目的語がないという点でいわゆる能格動詞を含む構文と同じだがその構文自体のもつ意味あるいは動詞等の点において異なり，また，文全体の表わす意味に関してい

えば総称文と似ているが形式上はこれと異なる。いずれにしても，これらの構文は統語的相違のみならず意味解釈からの考察を加える上で関連している。そこで本稿では，中間構文の特性を再検討することにする。第2章では，中間構文の動詞，および，表層主語，動作主等に関する先行研究を紹介し，その妥当性に触れる。第3章では，表層主語，動作主さらに修飾要素を含む構文全体のもつ意味を意味論的および情報構造的観点から考察をしていくことにする。

## 2．中間構文の特性

### 2．1　中間動詞の他動詞性，自動詞性

前述したとおり，中間構文は形式上目的語をもたないという点ではいわゆる能格動詞構文と同じであり，ともに，(4b，5b)のように表層主語である books，the ice が他動詞の目的語の位置にある文(4a，5a)と対をなして示されることが多い。これまでの研究では中間構文に生ずる動詞が他動詞であるのか自動詞であるのかということが議論されてきた。そこで，まず，動詞の他動詞性，自動詞性に関する先行研究をみることにしよう。

(4) a．They sell books for boys.

　　b．Books for boys sell well.

(5) a．The sun melted the ice.

　　b．The ice melted.

中間動詞が他動詞であり能格動詞が自動詞であると主張する根拠の一つとして，Keyser and Roeper (1984) は動詞の -ing 形を名詞の前に置くことができるかどうかということを挙げている。(6)のように自動詞は前置でき，(7)のように他動詞ではできない。これと同様，能格動詞は -ing 形の前置を許すが中間動詞の場合は容認不可となる。

(6)　the running boy

　　the dying flowers

(7) *the pushing truck

　　*the killing boy

(8)　the bouncing ball

　　the roasting chicken

(9) *the bribing bureaucrats

　　*the painting wall

さらに，(10)のように動詞の最初の姉妹 (the first sister) を前置して複合語をつくることがで

きるのだが，中間構文の副詞を前置しても複合語はできない。これは，中間構文の副詞が最初の姉妹ではなく，その動詞が根底で目的語を有している他動詞であるためであるとする。

(10) a． The boat sinks fast.

b． the fast-sinking boat

(11) a． The floor waxes easily.

b．*the easily-waxing floor

第二の根拠として，The soldiers are dying away like flies のような反復・継続の意味の away は自動詞と共起するが他動詞とは共起しないこと，これと平行して能格動詞は away と共起するが動詞の直後に痕跡の残る中間動詞では共起しないことを挙げている。

(12) The ships are sinking away.

Bones are fracturing away everywhere you look.

(13) *The bureaucrats bribe *t* away easily.

*The room paints *t* away easily.

第三の根拠として，自動詞は接頭辞 out を付加することによって他動詞となることができるが，中間動詞はこの接頭辞を付加することができないことから中間動詞は自動詞でないことを示している[3]。

(14) The ball bounced.

The basketball outbounced the baseball.

(15) Hedges trim well.

*Hedges outtrim trees well.

さらに，安井(1992)も指摘するとおり，自動詞が同族目的語をとることができるのに対して中間動詞は同族目的語をとることができないという事実からは他動詞的であるといえる。

(16) *The book sells a good sell.

これに対し，中間動詞の自動詞説を唱えている Fagan(1988)は，Keyser and Roeper(1984)が第一の根拠として挙げた複合語生成がそもそも間違っていると反論する。複合語には，名詞－形容詞によるものか形容詞－形容詞によるものしかなく，副詞を用いた複合語はないからである。もちろん(17)のように -ly 副詞を用いた形もあるが，これは Allen(1978)によれば(18)と同じ統語的な句であって形態的な分析を要するものではなく，したがって，中間動詞は他動詞とはいえないと主張する[4]。

(17) a． swiftly-falling

b． rapidly-rising

(18) a．　fall swiftly

　　b．　rise rapidly

また，Fagan は動詞に接尾辞 -ing を有する形容詞を Lees (1968) に従い動名詞的形容詞 (gerundive adjective) と呼んでいるが，これは自動詞からしかつくることができない。能格動詞の場合はこの動名詞的形容詞の生成を許すが中間動詞はこれを許さず，彼女の主張と矛盾するようであるが，動名詞的形容詞はそれが修飾する名詞の永久的特徴をいうものではないという点から説明しようとしている。知覚動詞の後の small clause は出来事を表わす読み，あるいは，一時的な状態を表わす読みしか許さない。上述の動名詞的形容詞はこの small clause の補語として生じることができる。すなわち，動名詞的形容詞は出来事を表わす読みをもち，これを形成する動詞も出来事を表わす読みをもつといえる。したがって，動名詞的形容詞を形成できる能格動詞は出来事を表わす自動詞といえる。だが，自動詞であっても状態を表わす動詞は動名詞的形容詞をつくれない。つまり，中間動詞が動名詞的形容詞を形成できないのは中間動詞が他動詞だからではなく，状態を表わすからであると説明している。

たしかに，中間構文は状態を表わし，能格動詞構文は出来事を表わしているといえる。だが，そうであるからといって Fagan (1988) の説をそのまま受け入れることはできない。先に示した安井 (1992) にも述べられているように，自動詞であればとれるはずの同族目的語をもたないという事実がある。

Fagan の意味を重視するという立場は重要であり，本稿もその立場を支持するが，動名詞的形容詞が中間動詞で許されないのは中間動詞そのものが状態を表わしているからであるとするのではなく，むしろ，中間構文全体が特性・状態を表わす意味をもつ構文であるからと考えるべきである。

中間構文の主語に他動詞構文の目的語を成していたものが生ずるということから，同じように他動詞構文の目的語を主語にとる受動態と比較してみると，受動態が動作主を表わす by 句を伴うことのある完全に他動詞詞性を有する構文であるのに対し，中間構文にはそれがない分受動態より他動詞性が薄れ自動詞性が現われているといえる。

(19) a．　The door was opened easily by John.

　　b．　The door was opened.

　　c．　The door opens easily.

(19a) は動作主の存在からも明らかに他動詞性が強く，中間構文は動作主のない受動態と比べても，やはり，他動詞性は低い。もちろん形式上中間構文には目的語がないので自動詞性をもつといってしまえばそれまでだが，中間構文では他動詞の目的語を成していたものが主語とな

るという点でその動詞は本来自動詞と異なり受動態同様他動詞としての性格を持ち越し他動詞性を帯びているといえる。だが，動作主が存在しながら表層に出ないということから受動態より他動詞性が減って自動詞性が現われているといえる。

中間構文が他動詞構文と対応するからといってすべての他動詞が中間動詞になるかというとそうではない。よくいわれるように中間構文には動作を表わす動詞が主に用いられ，感情を表わす動詞は生じない。

(20) a． John loves Mary.

b．*Mary loves easily.

感情を表わす動詞の主語は動作主ではなく experiencer であるし，これらの動詞をもつ構文は主語に関する状態(特性)をすでに表わしているのでわざわざ中間構文にしなくてもよいためであるといえよう。

また，同一動詞であればどのようにでも中間構文をつくれるかというとそうではない。つまり，表層で主語にくるものによって左右されることからも，表層での構文全体をながめる必要があるといえる。

(21) a． John killed the chicken.

b． The chickens kill easily.

c． John killed Mary.

d．*Mary kills easily.

以上，他動詞性，自動詞性に関する事実をみてきたが留意すべきことがひとつある。中間構文の動詞が本来的に他動詞であるとか自動詞であるとかという議論ももちろん必要であるが，中間構文を論じる際これまでのような根底・深層での議論をするより表層における構文の議論をする方が重要であるということである。中間動詞が本来他動詞であるとか自動詞であるとかどちらかに分類しようということは難しく，むしろ他動詞性と自動詞性をもつと考えるべきである[5]。また，形式上の特徴を論ずる際に中間構文の意味を介助せずに論じることも難しい。別の言い方をすれば，この問題を単に統語上の観点からのみ解決しようとしても無理が生ずるということである。このように，単に深層での動詞の他動詞性，自動詞性のみを問題にしても中間構文の本質的な問題解決にはあまり関係がないと思われる。中間構文というのは表層での議論，特に意味解釈が不可欠であるといえる。

## 2．2　中間構文における表層主語，深層主語，および，修飾要素

どんな名詞でも中間構文の表層主語になれるかというとそうではない。Fellbaum (1986) に

よると，この構文の主語になれるものは(22b，d)のように被動者(patient)，つまり，対応する他動詞構文の目的語を成していたものであって，動作主ではなく動作の対象であったものが主語位置を占めることができる。

(22) a．John opned the door.

b．The door opens easily.

c．That shop sells video tapes.

d．Video tapes sell well.

しかし，被動者でも主語になれないものがある。

(23) a．John killed some chickens.

b．The chickens kill easily.

c．John killed Mary.

d．*Mary kills easily.

また，(24a)が容認可能なのは，演奏する人間の能力を問わず誰にとってもこのピアノは調律されていていい音色を出すということであるが，(24b)の場合ピアノ，ヴァイオリンそのものより演奏者個人の技量が大きく関わっているから容認不可となる。

(24) a．This piano plays easily.

b．*This sonata plays easily.

ところで，(24a)と(24b)の違いは動詞による行為が主語に物理的に及ぶか否かという点にあるということができるとも思われる。主語であるピアノに実際に触れることは可能だが，ソナタに触れるということはない。しかし(25)のように行為が直接及ぶというのではないものでも主語に生じ得る。

(25)　She takes/photographs well.

(彼女は写真映りのいい人だ。)

この場合，実際に被写体である彼女に触れたりしてはいない。したがって，物理的接触が問題なのではなく，行為をする側の能力の差を聞き手に想起させるようなものは主語として問題になるといえる。

また，Fellbaum(1986)は(26a，b)のように被動者であっても人間は中間構造の表層主語になれないといっている。

(26) a．*The boss handles easily.

b．*Babies wash in the small plastic tubs.

これらが容認不可なのは，人間が主語の位置を占めるとたとえそれが被動者であっても動作主

と解釈されやすいからであるという。しかし，実際には次のように人間が主語になることがあるが，この点を説明していない。

(27) a． Bureaucrats/government officials bribe easily.
(官僚／政府高官は賄賂がきく。)
b． She takes/photographs well. (=(25))

Fagan (1992) は Van Oosten (1977, 1986) のいう "responsibility" を支持し，動詞によって表わされる行為に対して "responsibility" をもつと思われるものが中間動詞の主語になれるとしている。たしかに，この主張で次のような相違を説明することができる。

(28) a． The book sells well.
b． *The book buys well.

本が売れるのは本の善し悪し，つまり，本のもつ品質で本に責任があるが，どんなにその本がすばらしくても本を買うかどうかはあくまで人間側の意志の問題で本に責任があるとはいえない。したがって，(28a) は容認されるが (28b) は容認されない。だが，この考え方によっても(26)，(27)のような人間主語の問題を解決できない。(27a) の場合，賄賂を受けるという行為の責任は官僚にあるから容認可能になる。ところが，上司が扱いやすいかどうかは上司の側に責任があるといえるのに (26a) は許されない。もっとも，扱う側にも責任はあるといえるかもしれないが責任の度合いは主語である上司の方が大きいといえる。(25)と(26)の違いは単に人間であるからということだけでも "responsibility" という問題でもすまされないようである。この点については次章で取り上げる。

さて，中間構文が能格動詞構文と異なる点の一つに動作主の存在がある。この点に触れる前に中間構文の意味を考えておく必要がある。すでに触れたとおり，中間構文はその主語の特性 (characteristics) を述べるもので，能格動詞構文は一回の出来事 (single event) を述べるものである。(29)は主語であるドアがもっている開けやすいという特性を述べており，(30)は風のせいであろうと誰がやったのであろうとドアが開いたという出来事を述べているにすぎず，開いた原因は問題ではない。

(29) The door opens easily.

(30) The door opened.

一方，(29)はドアのもつ特性について述べているのだが，その開けるという行為をするものがいることを示唆している。Fellbaum (1986) はこの動作主は anybody であるとしている。誰がやっても，誰にでもドアを開けることが簡単にできるということである。また，動作主を表層に表わすと容認されない。動作主は特定のものではなく，内包されていなければならないとい

うのである。だが，なぜ動作主が現われると容認不可能になるのかという点の説明がない。

(31) a．The paint sprayed on evenly.

b．*The paint sprayed on evenly by the painter.

これに対し，Stroik (1992) は動作主を表層にとることができるとしている。一つは for 句の形で，他の一つは主語に生じる照応形としてである。この照応形と一致する潜在的な先行詞があってそれは動詞句内にある。したがって，(34a，c) のように動作主である深層主語が表層に現われた場合，照応形はその深層主語と一致しない場合は許されないとする。

(32) a．That book read quickly for Mary.

b．No Latin text translates easily for Bill.

(33) a．This book reads poorly.

b．Books about oneself never read poorly. [Books about oneself$_k$ never read poorly EC$_k$]

c．Letters to oneself compose quickly.

(34) a．*Books about herself read poorly.

b．Books about herself read quickly for Mary.

c．*Books about oneself read quickly for Mary.

だが，なぜ動作主の具現が by 句では許されず照応形や for 句で問題がないのかという説明がない。

次に，中間構文と能格動詞構文の相違として挙げられる修飾要素である副詞についてみることにしよう。中間構文は副詞的要素がないと容認されないが能格動詞構文は必ずしもそうでない。

(35) a．??These shirts wash.

b．These shirts wash in cold water

c．??The car drives.

d．The car drives easily.

(36)　The ice melted.

ただし，中間構文に生ずる副詞は難易を表わす副詞 (facility adverbs) に限られ，一般的ではない特定の動作主を想起させるような副詞は生じない。

(37) a．Red wine spots don't wash out easily.

b．*Red wine spot don't wash out carefully.

c．Cotton irons easily.

d．*Cotton irons cautiously.

また，動詞が表わす行為の最中あるいは後の patient の状態を表わす event adverbs[6] も中間構文に生じる。

(38)　This dog food cuts and chews like meat.

そこで，次の章では表層主語，動作主，修飾要素に関するこれらの事実を情報構造を含む意味論的見地から考察することにする。

## 3．中間構文に関する意味論的・情報構造的再分析

英語の文の最も一般的な機能は「何かについて，何かを述べる」ということである。この「何かについて」の部分が英語では表層主語に当たる。中間構文の場合は表層主語についてその特性を述べるという機能をもっている。この機能からみて非常に似ているのが総称文である。Keyser and Roeper (1984) は，中間構文は総称文と呼ばれることがあり，一般的に真実であると思われる命題を述べているものであるとしている。たしかに，英語の総称文と中間構文には類似点がある。統語的には時制に制限がある。中間構文も総称文も基本的には現在時制が普通であるといわれる。Fagan (1988, 1992) は現在進行時制，過去時制の中間構文は容認不可能あるいは容認しがたいとしている。(40b, c) は文法的な文であるが総称文という解釈は不可能である。

(39) a．Bureaucrats bribe easily.
　　This book reads easily.
　b．? Bureaucrats are bribing easily
　　? This book is reading easily.
　c．? Bureaucrats bribed easily.
　　? This book read easily.

(40) a．A cow eats hay.
　b．A cow is eating hay. (non-generic)
　c．A cow ate hay. (non-generic)

しかし，実際には次のように進行時制も可能である。

(41)　Books for boys are selling well.

しかし，進行時制であるからといって必ずしも出来事を表わしているというわけではない。これは限られた期間内における習慣的行為ともいえるべきもので出来事ではなく状態に近い。つ

まり，(41)は進行時制であっても一回の出来事を表わしているのではなく少年向けの本について売れ行き，つまり本の特性状態を表わしているのである。そういう意味では，過去時制も可能であるといえる。

中間構文の中には総称的解釈をもつと思われるものもたしかにある。表層主語が類を表わしていると思われるものである。

(42) a．　Pine saws easily.

　　b．　A person who isn't selfconscious photographs well.

周知のとおり，類を表わす主語ばかりが生じるわけではない。(35d)，(38)のように特定的な主語も同様に生じる。ただし，総称文の場合，不定冠詞／定冠詞＋単数名詞も類を表わすことができるのに対し，中間構造では不定冠詞，定冠詞付きの単数名詞が(42b)のように修飾語をもたずに類を表わすということはない。あくまでも特定的な意味である。すでに述べたが，何かについて何かを述べるという場合の何かは会話・談話に初めて導入されるものではなく，既知のものであり，文の主題となる。また，動作主がいながら主語を動作主ではなく他のものにするということは動作主を表に出したくない，あるいは出す必要がないということである。受動態で動作主が一般的な人，または，いう必要のない場合わざわざ by 句で具現しないのと同様，中間構文でも通常，動作主を具現せず，表層主語が前面に出てそれについて述べるという形をとるのである。この動作主についてはまた後で述べることにする。

では，表層主語に生じる名詞にはどういう特性が備わっているのであろうか。Hawkins (1981)は所有構造になりやすい名詞句を有生性(animateness)に関して一線上に並べた場合，名詞が次のような順序で現われると示した。階層の高い人間が左側で無生物が右側にくる。

(43)　HUMAN＜HUMAN ATTRIBUTE＜NON-HUMAN ANIMATE＜NON-HUMAN INANIMATE

(44) a．　Mary's cat

　　b．? the cat of Mary

　　c．　the cat's basket

　　d．? the basket of the cat

メアリーと猫では人間であるメアリーの方が左側に，生物と無生物では生物である猫の方が籠の左側に生じる。これは所有構造について述べたものであるが一般的な文(能動態)にも当てはまる。能動態の場合，通常，文の左側つまり主語の位置は人間の方が占めやすい。ところが，中間構文の主語は本来他動詞の目的語を成していたわけであり，動作主を具現したくないのであるから(43)の階層の逆，つまり，(45)のように，通常の文の主語になる階層のまったく逆になる

傾向が強いといえる。このことから動詞が同じであっても主語によってその容認度が違ってくるということが説明できる。

(45)　無生物＜人間以外の生物＜人間の一部＜人間

(46) a．　The car handles easily.

　　b．*My boss handles easily.

(47) a．　This sweater washes well.

　　b．*This baby washes well.

もともと handle は人間主語をとり人間，人間以外の生物，無生物を対象としていたわけであるが，中間構文の主語には(45)からこの中でも無生物が占めやすいということがいえる。Wash も人間主語に対し人間，人間の一部(手，足)，人間以外の生物，無生物を対象にしているが中間構造では無生物が最も主語につきやすいといえる。

では，人間を主語にとる次のような中間構文についてはどうなのであろうか。(48)では賄賂を贈る側も贈られる側も，また写真をとる側もとられる側も人間である。写真の場合，被写体が常に人間であるとはいえないが，被写体としての頻度は人間も人間以外の生物も無生物も横一線に等しく並ぶわけである。

(48) a．　Bureaucrats/Government officials bribe easily.(=(27a))

　　b．　She takes/photographs easily.(=(27b))

(48a)の場合，賄賂を贈る対象はまったくの生身の人間としてではなく，むしろ役職という機能を担う人間の一部，もっというなら役職そのものと同様であると考えられる。また，(48b)の場合，「被写体」ということばからも察せられるように，写真をとる対象は生身の人間としてではなく物と同様に扱うことができる。したがって，(45)の階層と何ら矛盾することはない。これらの動詞が中間動詞として用いられた場合に主語の位置に人間がきてもおかしいとは感じられず，容認可能になるのである。ここでも，中間構文に関しては意味を考慮せずに説明をすることはできないということがわかる。

さて，中間構文における動作主の具現については前節で Stroik(1992)の見解を述べたが，主語の名詞句内に生ずる照応形は厳密な意味では主語とはいえない。また，文末に前置詞句の形で具現されるとしているが，注意すべきは動作主を by 句ではなく for 句で表わしているということである。

(49) a．　That book reads quickly for Mary.(=(32a))

　　b．　No Latin text translates easily for Bill.(=(32b))

ところが，この for 句は受動態を除くほとんどの文に付加することができる句である。つまり，

はっきり動作主ということを表わさなければならない(50b)のような受動態に付加できないのであるから，for 句があるからといって必ずしも動作主を具現できたとはいいきれない。

(50) a．The enemy destroyed the city.

b．The city was destroyed by the enemy.

c．the city's destruction by the enemy

また，動作主が具現されても動作主指向の副詞は共起しないことから，動作主を具現しても中間構文の表層主語指向は変わらないといえる。このように中間構文は主語の特性を述べる表層主語指向であり，あくまでも主題は表層主語であるから動作主の方へ目を向けさせるような by 句は中間構文の性格と整合しないのである。

(51)　*This book reads carefully for Mary.

さらに，(49)の文は対比(contrast)を含んだ有標文(marked sentence)であるともいえる。つまり，Mary や Bill は(52a，b)のように anybody が下敷きになって現われたものである。「誰にでも……」という総称的意味を含んだ文を下敷きにした二重底のような文であるといえる。

(52) a．That book doesn't usually read quickly for anybody, but....

b．Latin texts usually translate easily for anybody, but....

このように，総称文と中間構文は似ている点があるが総称文は中間構文のように動作主を深層にもつというのではなく表層主語が動作主を兼ねていることがあり，また，動詞も他動詞派生，自動詞派生どちらでも問題はないという違いがある。

次に，情報構造ということについていうと，中間構文において新情報を担っているのは述部，特に修飾語である。したがって，この修飾語である副詞がないと容認不可能になるということは当然である。Grice(1975)の会話の原理の中の量の格率(Maxim of Quantity)にもあるように「必要とされる情報量を与えよ」ということを満たさなくなるからである。

(53) a．? The door opens.

b．The door opens easily.

(53a)は決して非文法的ではないが芝居のト書でもないかぎり情報量という点からみるとゼロに等しい。副詞の easily があってこそ十分な情報量をもっていることになるのである。そういうわけで修飾要素は中間構文には欠かせないのである。

では，総称的主語をもつ次の文を比べてみよう。

(54) a．Doors open easily.

b．This door opens easily.

c．Doors open more easily (than cans).

(55)　Bureaucrats bribe easily.

(54a)は(54b)より情報量が低い。ドアには開くという機能がもともと備わっているわけであるから何かと比較して開けやすいとか特定のドアについて開けやすいという方が情報構造的には容認度が増す。一方，官僚には賄賂を受けるという特性がもともと備わっているわけではない。そういう意味で(55)の方が(54a)よりも情報量が多くなる。つまり，総称的主語の場合，主語と述部の関係が情報量の問題に大きく関わってくるといえる。

## 4．結語

本稿では中間構文の特性を意味論的，情報論的見地から再考してきた。動詞に関していうと，これまでの研究では深層構造において他動詞であるのか自動詞であるのかという議論に終始していたが，中間構文を論じる際には深層構造よりも表層を重視して論じるべきである。たしかに，目的語を有する他動詞と対を成すためその他動詞性をもっているといえるが受動態と異なり動作主が表層にない分自動詞性が出ているといえる。つまり特殊な用法であるというべきである。表層主語に関しては，通常の文(能動態)で主語になりやすい階層とは逆の階層，つまり，中間構文では人間よりも人間の一部，それよりも人間以外の生物や無生物の方が主語になりやすいということを階層を用いて論じた。動作主の具現の問題に関しては，中間構造で生ずるfor句は受動態におけるby句と異なりどのような構文(受動態以外の)にも生じ得るわけでそれがあるからといって明らかに動作主が具現されたといいきれない。特定性に関していえば，不特定主語も特定主語も同じように生じるが，総称的主語の場合は述部との関係によって情報量が変わり容認度に多少差が生じてくると思われる。が，この点については今後の研究課題とする。

いずれにしても，中間構文を論じるときには意味論的，情報構造的観点を無視することはできない。中間構文は主語の特性を述べるという意味機能をもち能動態でありながら受動態のような解釈をうける高度な構造である。この点は中間構文の習得年令が他の構文よりも高いということからもいえる[7]。

## 註

1. 本稿では中間構文の派生過程に関して詳細を論じることはしない。Keyser and Roeper(1984)は，中間動詞は最終的に統語部門で移動規則がかかって派生されるが，能格動詞は語彙部門で移動規則が適

用され派生されるという。他方，Fagan(1988)は，中間動詞の生成は語彙部門で(i) Assign *arb* to the external $\theta$-role,(ii) Externalize the direct $\theta$-role という二つの規則によって出現するという。

2. 本来，能格動詞，中間動詞という動詞の類は一つの用法であると考えられるが，本稿では便宜上これらの用語をそのまま用いる。
3. Keyser and Roeper(1984)は他動詞に付加できる接頭辞 re- を能格動詞に付加できるという事実を挙げている。re- 動詞は theme を必要とするので能格動詞は他動詞ということになってしまう。彼らはこの点を能格動詞の主語が本来目的語の位置から移動した theme であるため能格動詞構文に許されると説明している。
4. Fagan(1988) は他にも Keyser and Roeper(1984)に対する反論の証拠を挙げているが本稿ではこれ以上立ち入らない。
5. 中間動詞および能格動詞の他動詞性，自動詞性に関して北爪(1992)は歴史的考察をし，中間動詞は他動詞性が強いと主張している。が，総語論的，意味論的観点を無視して歴史的発生だけで他動詞性が強いということはいえない。
6. Vendler(1984)の用語。
7. Keyser & Roeper(1984)によると能格動詞構文の習得年令は2才で，中間構文の場合は6才である。

## 参考文献


Allen, M. A. 1978. *Morphological Investigations.* Doctoral dissertation. University of Conneticut, Storrs.

Fagan, S. 1988. "The English middle." *Linguistic Inquiry* 19: 181-203.

———. 1992. *The Syntax and Semantics of Middle Constructions.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Fellbaum, C. 1986. "On the middle construction in English." *Indiana University Linguistics Club.*

Grice, H. P. 1975. "Logic and conversation." *Syntax and Semantics.* Eds. by P. Cole & J. Morgan, New York: Academic Press.

Hawkins, R. 1981. "Towards an account of the possessive *NP's N and the N of NP.*" *J. Linguistics* 17: 247-69.

Keyser, S. and T. Roeper. 1984. "On the middle and ergative construcions in English." *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.

北爪佐知子．1992.「中間動詞の歴史的考察」第10回日本英語学会口頭発表。

Lees, R. B. 1968. *The Grammar of English Nominalizations.* The Hague: Mouton.

Stroik, T. 1992. "Middles and movement." *Linguistic Inquiry* 23: 127-37.

Van Oosten, J. 1977. "Subjects and agent hood in English." *CLS* 13: 451-71.

———. 1986. *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation.* Bloomington: Indiana Linguistic Club.

Vendler, Z. 1984. "Adverbs of action." *Papers from the Parasession on Lexical Semantics.* 297-307.

安井泉．1992.「能格動詞と中間動詞」.『言語』21(7)：32-5.

安井稔．1978.『新しい聞き手の文法』．東京：大修館.